

最も遠い国の一つ、アルゼンチン。首都、ブエノスアイレス。いい空気、という意味だ。タンゴがある。マラドーナが育った。「母をたずねて三千里」で、母をたず

窓のそとは、森

④w未来を見せてくれた電車

慶應義塾大学大学院
メディアデザイン研究科教授

中村 伊知哉



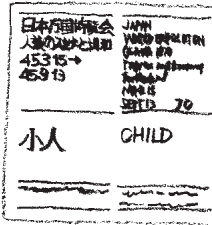
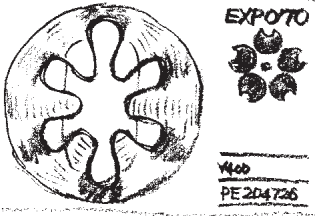
ねた。妙にそそる。

そそられて、行ってみた。地下鉄に乗った。すると激しい既視感に襲われた。この懐かしさは何だ？ えんじ色の車内を見回した。

あれっ、コレ阪急電車やないか？

そう、古い阪急の車体だった。阪急の車両が第二の人生を、いい空気で送っていたのだ。

初めての阪急は小学校四年生だった。時は大阪万国博覧会。住んでいた京都から、確か淡路駅まで乗って向かった。こんにちは。こんにちは。世界の、国から。一九七〇年の、こんにちは。三波春夫さんが朗々と西暦を歌い上げてくれたおかげで、あれが四十五年前のイベントだったことを忘れない。



母と二

人だった。
チケット
が今も手
元にある。
母のには
「大人」、
私のには
「小人」
とある。
昔は子ども
の券に
はたいて

い子どもではなく小人と書いてあった。小さい人だから、仕方がない。

その脇には「人類の進歩と調和」と記されている。人類は、進歩するものだった。そうだボクらは進歩を当たり前だと思っていた。未来は明るかった。空をエアカーが飛び、宇宙都市や海底都市に人が住み、テレパシーで交信する。未来、早よ来い、と思っていた。

今の子どもたちに「未来は」と問うと、核戦争とか、酸性雨とか、難民とか、身もふたもないことを言う。彼らにとつて地球は滅亡に向かっている。進歩も成長もしないようだ。確かに彼らが生まれてから、日本は成長していない。彼らが未来に期待できないのは大人のせいであつて、小人のせいではない。私たちが未来を提示できていないのだ。

万博。人気のアメリカ館やソ連館は列が長蛇すぎて無理。結局、並んで入れたのは、住友児童館と三六〇度の映画を見せてくれたみ

どり館の二つ。万博は、その一度だけ。数十分で行けるとはいえ、母にも、周りの大人にも、何度でも連れて行く余裕はなく、子どもだけで行くのは学校が禁じていた。阪急で河原町駅に戻った。へとへとだった。出たところの店で、二人してラーメンをカウンターですすった。うまかった。めつたに外食もしたことがなかったから、リアルに覚えている。その店はいま「天下一品」になっている。

四十五年前、そうやって精一杯小人に未来を見せてくれた。おかあさん、ありがとう。ぼくはまだ小人たちに、未来を見せられていません。

プロフィール 一九八四年郵政省入省。橋本行革で省庁再編に携わったのを最後に退官し渡米。一九九八年MITメディアアラボ客員教授。二〇〇二年スタンフォード日本センター研究所長。二〇〇六年より慶應義塾大学教授。社団法人融合研究所所長などを兼務。著書に『コンテンツと国家戦略』（角川THINK選書）など多数。